



25年春闘準備

みんなが納得できる賃上げを

物価高騰が止まらない

帝国データバンク調査では、主要食品の値上げは、22年1月4%、23年15%、24年1月7%となっています。また昨年夏

96年の83%まで低下、金額では68万円も実質的に年収が減りました」となります。

コメの大幅値上がりはいまだに収まっています。こうした異常な物価高騰により、私たちの暮らしあかり悪化しており、賃上げがあつても暮らしが改善された実感がない、子供の教育費がたいくんと大幅な賃上げを求める切実な声が上がっています。

賃金の上がる国への転換

実質賃金は、この30年近く下がり続けています。厚労省の調査によると、ピークだった96年に116.5だった実質賃金指数は23年には97.1まで落ち込

大企業は大儲け

大企業は労働者の生活悪化を尻目に大儲けしています。大企業の内部留保は539.3兆円(24年3月末)。株主への配当も

32.5兆円とそれぞれ過去最高を更新しています。

大企業の「労働分配率」(労働者が働くことによって生み出した価値(付加価値)と人件費の比率)は過去最低です。

労働法制改悪

財界と政府が進める労働法制改悪では、「1日8時間週40時間労働」という労働時間規制の原則で、労使の協定に基づく時間外労働や変形労働、裁量労働の要件を大幅に緩和する。

例えば36協定について言うと今は事業所ごとに過半数組合や従業員代表との36協定を結ぶ必要がありますが、それを本社一括で、従業員代表との協議で決めてはどうかという事が検討されています。企業の裁量で、労働者を好きなだけ働かせることが出来る仕組みづくりも検討されています。

生活での支出は40代から50代が最もかかります。この世代は仕事上でも重要な役割を果たしています。しかし、この世代の賃金水準は20年前と比べ大きく落ち込んでいます。

中高年頭打ちの賃金のは50歳代以降の定昇ゼロや昇給なしのような年齢差別を撤廃させなければなりません。

「ジョブ型人事」とは個々の職務に応じたスキルへの到達度で労働者を評価し、未達成の労働者には賃下げや降格、他の職務への異動などを押し付けていくとい

うものです。日本IBMなどのジョブ型人事を導入しているところでは、プロジェクト終了や事業再編で仕事がなくなつた場合やロー

パフォーマー(低評価者)には、社内公募と称する制度に応募して、自ら見つけることが出来なければ退職に追い込まれます。

「ジョブ型」が導入されている企業では、賃上げも極端な格差が拡大しています。

仙洞田一彦

年が明けた、といつても昨日の大みそかと、日常習慣が変わるわけじやない。屠蘇気分、正月気分を味わおうと、何年か前まで元日は朝から酒を飲んだ。屠蘇は本来薬酒だが、飲むのはいつもの晩酌の酒。だが、正月番組のテレビ相手じやつまらないのでやめた。子どもが小さい頃は「お年玉」で正月気分。父母のいる故郷への帰省もあつた。とつぐに両親は亡くなつた。今はゆとりも、体力もない後期高齢者だから、昨日と変わらない生活。

午後の散歩もいつも通り。しかし元日は一年の始まり、

年が明けた、といつても昨日の大みそかと、日常習慣が変わるわけじやない。屠蘇気分、正月気分を味わおうと、何年か前まで元日は朝から酒を飲んだ。屠蘇は本来薬酒だが、飲むのはいつもの晩酌の酒。だが、正月番組のテレビ相手じやつまらないのでやめた。子どもが小さい頃は「お年玉」で正月気分。父母のいる故郷への帰省もあつた。とつぐに両親は亡くなつた。今はゆとりも、体力もない後期高齢者だから、昨日と変わらない生活。

それにふさわしい散歩にしようと思った。そういうえば、屠蘇を飲み過ぎた気分で、フラフラよろよろの散歩も正月にふさわしいかもしない。

最近は酒を飲んでいなくてもよろよろ散歩だ。それはとろくもかく、格好つけて言えば原点に返るのだ。上京し、東京で生活を始めたところを散步するだけのこと。

一九六八年の春、上京した。今年の春が来れば、満五十七年だ。当時住んでいたところは、いま住んでいるところから、徒歩と電車で約一時間。

原点に立つて二〇二五年を始めよう。意気込みはあるが、正月の装いはない。ダウンのコート、綿の濃紺のズボン。靴はスニーカーといつものスタイル。どれも大分くたびれ

ている。かといって、誰かが何か言うわけではない。心の中では「爺だから仕方ない」くらいは思うかもしないが、口には出さない。それをいいことに自分で自分を許して、着られなくなるまで、履けなくなるまで使う。

煩わしいのでスマホも持たない。時間は知りたい時があるので、三千円の懐中時計を持つていて。

駅までの人通りは、いつもより少ない。二十四時間営業のコンビニ以外、商店もほとんど閉まっている。

電車の乗車時間はせいぜい

十五分か二十分。目的の駅に着いた。昔は、地上にあつた駅が地下になつていて。地上に出るまでのエスカレーターの感じからすると、かなり地

下深い。駅名も変わっていた。地上に出て驚いた。思わず何度も見まわした。まつたく見知らぬ土地に来たようだ。

昔は駅の改札を出るとすぐ、民家が並び、町工場もあり、人の生活が感じられた。それがない。

道路は舗装されていて、駅の真上に当るところは、駅ビルのような鉄筋コンクリートの建物があるが、周囲には建物がない。ふつうは駅ビルを中心にして商店街があるが、何もない。地上に出て来るま

で、駅の売店のようなものは見かけたが。

広場はバスロータリーのような作りで、停留所で見かけのと同じ標識も立つていて。何個か椅子も並んでいる。舗装道路と道路の間は、土がむ

き出しになつてゐる。それが
ずっと広がつてゐる。都市計
画とかがあつて、その建設途
中なんだろうかと想像したが、
それにしても広大な土地だ。

遠くに建物は見える。目測
では一キロぐらいあるのだろ
うか。それとも、もつとある
のか。私はどちらに行つたら
いいのだろう。分からなかつ
たら地下駅に戻つて、電車で
帰ればいいのだが、せつかく
來たのだ。天氣もいい。

いま眼前に広がる風景に、
昔の風景を重ねてみると、私
の行つて見たいところは更地
になつてゐるかもしれない。

更地になつてしまつていたら、
當時を思い起こし、初心に返
るなんてことは不可能だ。し
かし、その場所が更地になつ
ていたとしても、実際にその

地に立つてみれば、「新たな年
に向けて出発」という気分に
なるかもしれない。原点に立
ち返つたと思うかもしれない。

進むべきか。戻るべきか。元
日早々悩んでしまつた。もう
疲れてしまつた。バス停に四
つばかりある椅子の一つに腰
かけた。先頭のに腰かけると
客だと思われるかもしれない
ので、後ろの席にかけた。上
には申し訳ばかりの屋根がつ
いているだけだから、日差し
がじかに当たつて気持ちいい。

日向ぼっこ、昼寝にはもつて
こいの場所だ。

がじかに当たつて気持ちいい。

橋の名前が思い出せなかつ
た。もしここに住んでいる人
なら、それで通じるだらうと
思った。

やはり同年配だ。歩みを止
めてくれた。

「ああ、ショーテン橋ね」
「ショーテン橋……え？」

立ち尽くしていたところに
同年配のスーツ姿の男性がこ
ちらに向かってきた。なんと
なく通勤する姿に見えた。歩
き方、方向に迷いがない。こ

れから地下駅に降りるかもし
れない。

元日から通勤かとも思つた
が、勝手な思い込みだから違
うかもしれない。声を掛けた。

「すみません。昔、なんとか

橋というのが、この近くにあ
つたはずですが、どう行つた
かけた。先頭のに腰かけると
客だと思われるかもしれない
ので、後ろの席にかけた。上
には申し訳ばかりの屋根がつ
いているだけだから、日差し
がじかに当たつて気持ちいい。

橋の名前が思い出せなかつ
た。もしここに住んでいる人
なら、それで通じるだらうと
思った。

やはり同年配だ。歩みを止
めてくれた。

「ああ、ショーテン橋ね」
「ショーテン橋……え？」

記憶にある橋の名前とちょ
つと違うようだ。昔のことだ
から橋の名前も変わつたかも
しれない。

「天に昇ると書いて昇天橋」

私の疑問に、丁寧に答えて

くれた。たしかに空港が近い
から「昇天」がふさわしいか
かもしれないと思った。

「その橋にはどう行つたら
いいですか」

橋の名前が記憶と違うが、
とりあえずその橋に行つてみ
ようと思つた。行つてみれば、
私の単なる記憶違いかもしれ
ないかどうかが分かる。

男は振り返り、「こちらの道
をですね」少し道を戻りなが
ら、三差路のところまで行き
真ん中の道を指差し「この道
を真つすぐ行つて、広い道に
出ますから、そこを右に曲が
つてください。右ですよ」

私も男のあとについて行き、
「この道ですね」と地面を指
して言つた。真つすぐと、右
斜め、左斜めに進む三叉路だ

が、そこに立つて先の方を見てもそれほど変わりない。どの道を行つても同じように見えるから、聞いてみなければ分からぬ。

「そうです、そうですこの道です」

男もまた地面を指差して言つた。

「ありがとうございます」

私は頭を下げた。

「じや、気をつけて、お大事に」

男は言つて、私の出て来た方に向つて行つた。これから電車で出勤か。私は男を見送りながら、男の最後の言葉が気になつた。

「気をつけて、お大事に」、何に気を付けるのだろう。真昼間から強盗もないだろう。車かも知れない。見通しの良い

所だから、車がぶつ飛ばすの

だらう。そう思いながら、とりあえず、言われた道を歩き出した。「お大事に」は、見る

からに、私がよろよろしていきたのに、大きなお世話だなど

と、内心毒づいた。

人なんか通りそうもない道だつたが、人が数人歩いていた。

歩行器を押して歩いている

男を追い越した。体を左右に揺らせながら歩いている。着ているものは、私のものよりもくたびれている感じだ。よそ行きという感じはまったくない。綿のズボンは皺だらけ。

ダウンのコートも色が焼けている。黒色が白っぽくなつているところもある。年齢は私より上に見える。

歩幅が十数センチしかない

のではないかと思われる女性も追い越した。つま先はつつつつ、つつと忙しく前に出る

ものの、歩幅がないから進まない。じつとわき目も振らずに前進していた。

ガードレールに腰を下ろし

ていた男も追い越した。ずっと前にいたが、何度も立ち止り、立ち止りしていたから追いついてしまつた。

追い越してから、なぜバスを使わないのだろうと、考えた。タクシー乗り場もあつたのに。

しかし、自分のことを考えると、歩行は運動で、健康のためだ。いま追い越してきた人も運動のためかもしれない。それ以前に金がないということもある。

反対方向、つまり私の歩いた方、駅へ向かう人もいた。男も、女も、同世代か、上

くらいの人達ばかりだが、こちらは何となく元気がいい。

帰りの方の人が元気に見えるのは、用事が済んでホッとしましたからなのか。

橋が見えてきた。懐中時計をポケットから出してみると、三十分以上歩いたようだ。橋

の一番手前の柱に「昇天橋」

の字が見える。四、五人、人が立つてゐる。警察官の制服に似てゐるが、警察官とも違うようだ。検問をしているのか。

道は一つの間にか車道がなくなり、歩道ばかりになつていた。

前に二人いた。何か質問されている。私はその後ろについた。待ちながら橋の向こう

に見える風景を見た。近くであるにもかかわらず、靄がかかつているように見える。木造の平屋建て、二階建ての家が見える。道路もこの歩道の幅で、ずっと先まで続いているように見える。遠くの方では羽根つきをしているようだ。少しあかに懐かしい風景だ。少し上に目を向けると廻が上がっているのが見える。

「どうぞ、そのままお進みください」
検問している頑丈そうな男が言った。言われた方は、がつくり肩を落として、言われるままに橋を渡つて行つた。
次的人は、門を通ると「お帰り下さい」と言われた。私とすれ違う時、その人は私と目が合うと「ニヤツ」とした。目も、鼻もでかい顔をして、睨まれたら震え上がりそうだ。私はすぐに眼を逸らせた。

「次の方」
呼ばれて私は進んだ。
「本籍地、現住所、姓名、生年月日を言つてください」
聞かれて、何だ單なる本人確認かと思い、聞かれた通りに答えた。

「お客さん。お客さんこんなところで寝ないでください」
体当たりしたつてびくともしないような相手だし、元日早々こじれるのも嫌だし、向きを変えてもと来た道を帰つた。
「だめです」
「お故だ。道々考えた。する」と、「ニヤツ」とした人が途中で待つていて、話しかけた。
「あんたもよかつたね、今年も生きられるつてさ。あの橋は三途の川の橋だよ。喜ばなければりや」

橋の向こうのあの風景は、あの世の風景なのか……
前の方の人はいくつか質問を受けた後、金属探知機のよ

うな門を潜り抜けた。

「お帰り下さい」と言われた。
「私は怪しいものでもないし、凶器も持っていない」
私は声を大きくして言った。
「分かっています。とにかく、お帰り下さい」
「お分かりなら、行かせてください」
「お分かりなら、行かせてください」

喜ばなけりやと言われても、言つてはいる男の顔を見たら怖さが先に立つ。私は思わず身を退いた。すると男は、一步前に出て「うれしいじやないか。なつ。一人で乾杯しよう」そう言つて、私の肩を思いつきり叩き、揺さぶつた。